

6 高大連携

6.1 東京学芸大学との連携

管理機関である東京学芸大学とは継続的に連携を行っている。さらに、今年度からの新たな連携事業として、8.1.3に記す「都内国立校 SSH/SGH 課題研究成果発表会」を東京学芸大学主催で開催した。実質的な運営は本校が行ったため、実施の概要をここにまとめる。

6.1.1 SGH 推進委員会の設置と支援

本校および附属高等学校の SGH 事業を支援するために東京学芸大学内に設置された学長をトップとする機関である。昨年度から年に2回程度開催されており、主な内容は以下の通りである。

第1回：全体計画の確認・大学としての支援体制の確認

第2回：2015年度の報告（2016年1月現在）

高大連携入試と SGH 課題研究の関連についての検討・提案

第3回：2015年度の報告

2016年度の予定

大学の支援体制の具体的確認

- ・課題研究支援のための教員派遣
- ・評価策定委員会への教員派遣
- ・合同成果発表会の開催（主催東京学芸大学）

第4回：2016年度の報告（2017年1月現在）

- ・都内国立校 SSH/SGH 課題研究成果発表会の開催について

6.1.2 課題研究支援セミナーや評価策定委員会への教員派遣

東京学芸大学の教員派遣制度を活用して出張講義などをお願いしている。今年度の主なものは以下の通りである。

- ・2016年6月 課題研究支援セミナー講師2名（岸学名誉教授・狩野賢司教授）
- ・2016年6月 評価策定委員会 委員（岸学名誉教授）
- ・2017年2月 都内国立校 SSH/SGH 課題研究成果発表会 審査員（8名の教授陣）

6.1.3 都内国立校 SSH/SGH 課題研究成果発表会

実施日時： 2017年（平成29年）2月19日（日） 10:00～17:20

実施場所： 東京学芸大学 芸術館ホールおよび展示室

主催： 国立大学法人 東京学芸大学

目的：

(1) 生徒たちが SSH・SGH 課題研究の成果を発表し大学教員ら専門家からの評価を得ること
とで、各自の課題研究を進展させる機会とする。

(2) 生徒たちが主体的にフォーラムを運営し意見交換を行うことで、互いに知見を深め友人
人関係を拓ける機会とする。

(3) 高校と大学が連携して生徒たちの SSH・SGH 課題研究を支援し評価することで、育成す
べき資質・能力を見定め教育課程の改善に資する機会とする。

参加校：

筑波大学附属駒場高等学校 筑波大学附属坂戸高等学校
東京工業大学附属科学技術高等学校
東京学芸大学附属高等学校 東京学芸大学附属国際中等教育学校
早稲田大学高等学院

本校参加者： 3年生5名、4年生9名、5年生11名、6年生2名、合計27名。

会の規模（総参加者数）： 総計 約180名

- ①参加生徒：筑駒6 筑坂7 東工大20 早稲田3 附属高校14 国際中等25＝75名
- ②引率教員 約30名
- ③一般（来賓・保護者含む）約65名
- ④小・中学生 6名（学芸大附属世田谷中の生徒など）

実施概要

	口頭発表	ポスター発表	グループディスカッション
参加数	6校 8名(グループ)	6校 40名(グループ)	5校 8名(グループ)
場所	芸術館ホール	芸術館展示スペース SGH：1階 SSH：2階	芸術館ホール
時間	20分間 (発表13分 質疑7分)	30分間 3チーム交代制	60分間
発表言語	日本語 or 英語	日本語 or 英語	日本語を基本とするが 英語も可
審査方法	主催大学教員7名による 評価	来場者及び参加者によ る評価	
表彰	SSH部門 最優秀賞 SGH部門 最優秀賞	SSH部門 優秀賞3本 SGH部門 優秀賞3本	

時程：

- 10:30～10:40 開会式
 10:45～11:51 口頭発表Ⅰ (20分：質疑応答含む×3組)
 11:55～12:38 口頭発表Ⅱ (20分：質疑応答含む×3組)
 12:45～14:15 ポスターセッション 兼 昼食時間 (90分)
 14:20～15:26 口頭発表Ⅲ (20分：質疑応答含む×4組)
 15:30～15:50 全体講評
 16:00～17:00 生徒フォーラム
 17:05～17:20 表彰式 閉会式

口頭発表の概要

		発表タイトル	言語	所属
1	SSH	水俣と福島から考える日本の未来	日本語	筑駒場
2	SSH	Preparation of Colloidal Photonic Crystals from	英語	東工大
3	SSH	走幅跳技能を向上させるための特性要因分析	日本語	筑駒場
4	SSH	The effect of Japanese Megascolecidae and brandlings on clay soil's physical and chemical properties	英語	早高院
5	SGH	Why ballerina's skirt become short? -Change of the audience of France in 19 th century	英語	学芸附
6	SGH	The maximum use of mist in zero gravity	英語	筑坂戸
7	SGH	シビリアンコントロールの本質 ～政治家の軍歴に見る アメリカ国民と日本国民の意識の差～	日本語	学芸附
8	SGH	障がい者スポーツを通して、日本での障がい者に対する 差別・偏見をなくす	日本語	学芸国際

成果と課題：

口頭発表に関しては、ちょうど半数が英語での発表となった。興味深かったのは、英語発表者のほとんどが帰国生ではなく（正確には早高院の2名のうち1名が海外経験あり）、日本国内での英語教育でここまでスキルを伸ばしている点である。発表後、本人たちにインタビューしてみたところ、東工大附属生徒（No.2）と早高院生徒（No.4）は「昨年海外での研究発表会に参加し英語で発表したことで自信を付けた」と語っていた。学芸大附属の生徒（No.5）は「パスポートも持っていない。大学以降は英語が必須になるだろうからチャレンジしてみようと思った」とのことだった。5名とも（早高院は2名での発表）苦しみながら質疑応答も英語で対応した。審査員からの質問はもちろん、フロアからの質問も英語で活発

になされ、参加生徒たちには（教員にとっても）刺激的な場となった。課題としては、SSHとSGHの趣旨の違いをどのように評価に反映させるかという点がある。研究発表会全体としては、SSHとSGHの双方を聞いたことで「課題研究」への認識が深まったというメリットがあったが、双方に妥当性のある評価の方法の開発が必要であると感じた。今回は、自然科学系・人文社会系・芸術系とバランスよく審査員7名を依頼し、同じ評価の観点で全ての発表を評価していただいた。観点別の合計点一覧を下に示す。SSHに比べてSGHの発表が「分析とデータ」「構成と論理展開」の2観点で20点ほど下回っているのが目を引く。今回の発表者が特に劣っていたということではなく、SGHの課題研究全体に見られる特性ではないかと考えられる。SGHの課題研究を指導していく上で大きな示唆を得た今回の審査結果だった。

評価の観点	SSH / 満点	SGH / 満点
研究目的	117 / 140	110 / 140
構成と論理展開	111 / 140	92 / 140
分析とデータ	103 / 140	85 / 140
表現と話し方	105 / 140	99 / 140
スライド	118 / 140	106 / 140
質疑応答	107 / 140	97 / 140
合計	661 / 840	589 / 840

[都内国立校 SSH/SGH 課題研究成果発表会・SSH/SGH ごとに集計した観点別の評価]



都内国立校 SSH/SGH 課題研究成果発表会の記事（朝日中高生新聞 平成29年3月12日）

6.2 他大学との連携

6.2.1 United College London・University of Cambridge

主催：United College London

実施日：2016（平成28）年7月22日～8月1日

目的：今後世界を担う日英の高校生・大学生が国際社会のリーダーとなる資質を養うことを目的として開催されるプログラムを活用し、UCLが大学として取り組む社会課題についての知識を深め、文化・背景の異なる他者との対話を通して、自己の課題研究の充実を図る機会とする。また、今年度は福島県が後援しての「Facing Disasters: International Disaster Management and Humanitarian Responses」と題された大規模な公的シンポジウムが催される。このシンポジウムに参加して海外の研究者による「東日本大震災」関連の研究発表を聴き、自らもその発表に関わることで、国際的な課題意識の共有の機会を得る。

参加生徒：本校4年（高1）2名

他日本からの高校生20名余（福島県立福島高等学校・大妻女子高等学校・滝学園高等学校・愛知県立時習館高等学校・立教池袋高等学校・かえつ有明高等学校・大宮開成高等学校）。

現地の高校生20名余（Rikkyo School in England・Eton College・The American School・Dartford Grammar Schoolほか）。

成果と課題

○他国において「災害」のリスクがどのように考えられているのかを同世代の交流を通して学習できた。

○知識差／認識差／英語力の差があるグループ内でどのように結論を出すかを体験的に訓練できた。

○多様な経験や背景を持つ生徒・学生・社会人とのネットワークを生徒自身の力で築く機会を得られた。

▲事前研修と研修自体の関わりをさらに有機的なものにする余地がある。

▲教員が研修による生徒の変容をどのように測れるかを検討する必要がある。

課題研究との関わり・影響・効果

本校SGHの課題研究との関わり、影響については次の4点が指摘できる。

① UCL Grand Challengeの4大テーマと本校SGH課題研究の3つのテーマは、多様な点で関わりをもつことができる。よってUCLが大学全体の研究事業として継続的にこの事業を展開していることは、本校のSGH事業にとっても意義あることである。生徒は継続的にこの研修に参加することで、他国／他地域において、自分たちの研究と関わりのあるテーマや課題がどのように受け取られ、どのように研究されているのかということを実地に知り、その知識・経験を即座に異文化社会に生きる同世代の人々と共有する事ができる。

② UCLは英国の中でも多国籍・多文化に古くから対応している大学である。その大学の教授陣の講義を主軸としてUCL Grand Challengeの公的事业に参加できることは、本校における「葛藤と軌轢」について認識を深める機会を持つ事につながる。英国がEU脱退を決定した今後の時代・社会においてUCLという大学が担う役割やUCLが示す意思を現地で感じる事は国内にいてはできないことである。

③ 今年度UCL Grand Challengeが取り組んだテーマは「災害」とそのリスク、またそれに対応するレジリエンスをどのように構築するかということであった。リスクとレジリエンスについては、本校のSGH課題研究のテーマそのものであり、今回の研究発表や事前のディスカッションで得られた知見は直接的に生徒の知識／見解を拡大したと言える。

④ 今後改善の余地はあるが、今年度から教員向けのワークショップが開催され、その中でアクティブ・メソッドについて学ぶ機会があったことは、課題研究とポスト・アクティブ・ラーニングのあり方を検討する上で非常に有効である。本校においてはすでに教科学習の中でアクティブ・ラーニングの仕組みが作動していると言ってよい。しかし、今後校内と校外を結んでの「ポスト・アクティブ・ラーニング」の仕組みを構築していく上で、アクティブ・メソッドを教員養成段階で展開し、そのノウハウ

ウを持つ UCL の IOE(Institute of Education)がこの研修に関わりをもっていることは大きな意義を持つ。

6.2.2 Philippine Normal University

実施場所： Philippine Normal University （フィリピン、マニラ）

実施時期： 2017 年 3 月 22 日（予定）

目的：フィリピンにおける近年の教育に関する状況と課題を学習するとともに、SGH に関わる生徒各個人のテーマについて、現地大学生とディスカッションを行い、認識を深める。また、フィリピンの歴史文化に関わる展示を大学生と一緒に見学することにより、広くフィリピンについての現状と課題を話し合う。

参加生徒：本校 4 年（高 1）、5（高 2）年生 16 名

プログラム

フィリピンの教育についてレクチャー

日本の教育についてプレゼン（ISS 生）

PNU の学生と課題研究についてのディスカッション

（学生は 32 名、付属校の高校生も参加する可能性、8 グループ）

ナショナルミュージアム見学（学生によるガイド）



UCL では与えられたテーマに沿って、グループディスカッションや全体でのディスカッションが繰り返し行われた。

PNU では小グループに分かれて、現地大学生と研究課題や教育問題についてのディスカッションが行われた。

